

『Mind Charging』

第 186 回 発行：入試広報室 発行日：令和 3 年 1 月 13 日

黒澤明の名言



私はまだ、映画がよくわかっていない。

日本の映画の代表的な存在であり、世界的にも有名な黒澤監督が映画のことをわかっていないはずがないということは、言うまでもなくわかっていることだと思います。これだけ多くの人気映画を世に生み出すことができた“秘訣”は、『もっと良い映画を作るためにはもっと映画そのものを理解したい』という映画製作に対するハングリー精神だということが、この言葉から読み取ることができました。そのくらい全身全霊で映画と向き合っていた人物だったと感じます。

ハングリー精神と同じくらい感じたのが黒澤監督の謙虚な姿勢です。人によって趣向や感覚は様々ですから、観賞した人全員が絶賛する作品というものは黒澤監督でも生み出すことは不可能に近いと思います。そのことは本人も重々承知しながらも『史上最高の映画製作』を目指していたであろう黒澤監督には、そこに達しないことを“自分の力不足”と感じていたのかもしれませんが、また、そこまでのめり込むことができる環境があったことも黒澤監督にとって大きかったのだと思います。人それぞれ“こだわり”があると思います。夢中になって打ち込むものがあるということだけでも、自分にとって非常に幸せなことであり、大きなエネルギーになるのではないのでしょうか。(編集委員：入試広報室 鈴木)

黒澤 明(くろさわ あきら、1910年3月23日 - 1998年9月6日)は、日本の映画監督、脚本家。第二次世界大戦後の日本映画を代表する映画監督であり、国際的にも有名で影響力のある映画監督の一人とみなされている。ダイナミックな映像表現、劇的な物語構成、ヒューマンリズムを基調とした主題で知られる。生涯で30本の監督作品を発表したが、そのうち16本で俳優の三船敏郎とコンビを組んだ。青年時代は画家を志望していたが、1936年にP.C.L.映画製作所(1937年に東宝に合併)に入社し、山本嘉次郎監督の助監督や脚本家を務めたのち、1943年に『姿三四郎』で監督デビューした。『酔いどれ天使』(1948年)と『野良犬』(1949年)で日本映画の旗手として注目されたあと、『羅生門』(1950年)でヴェネツィア国際映画祭金獅子賞を受賞し、日本映画が国際的に認知されるきっかけを作った。その後『生きる』(1952年)、『七人の侍』(1954年)、『用心棒』(1961年)などが高い評価を受け、海外では黒澤作品のリメイクが作られた。1970年代以降は国内で製作資金を調達するのが難しくなるが、海外資本で『デルス・ウザーラ』(1975年)、『影武者』(1980年)、『乱』(1985年)、『夢』(1990年)を作り、国内外で多くの映画賞を受けた。1985年に映画人初の文化勲章を受章し、1990年にはアカデミー名誉賞を受賞した。没後、映画監督初の国民栄誉賞が贈られた。(Wikipedia 参照)